

永井玲衣 著

『水中の哲学者たち』

晶文社、2021 年

265 頁、1,600 円（税別）

たとえば何かを問いかけて、だれかと一緒に考えているときに、そのことを書いてみようと思いついたとして、どんなことを書くでしょうか。あなたはいったいだれで、どんな書き方をして、そして、どんな願いをこめて書くのでしょうか。

この本は、その問いへの一つの答えであると思えます。哲学研究者でもある永井さんが、日常生活に溶け込んだものとして哲学対話を描こうとしたときに（おそらく投稿先の性質とも関係するだろうけれど）読みやすい言葉や対話の場にいるリアリティ、そして柔軟なかたちでのクリティーク、批判のかたちを選んだのだと思われまます。

この本には印象的なシーンがいくつも織り込まれています。例えば、ある小学校で、人は何のために生きているのかをテーマにした対話の場で、こんなことが起こります。

最初の発言者は、「ひとに生きる意味なんてねえよ！」と叫んだ少年だった。……彼は発言したあと、なぜこんな不条理でわかりきったことを聞くのか、と言うかのように椅子に背をどしりと預けた。投げやりに言っているわけではなく、生きる意味なんてない生に対して、心から怒っているようだった。怒る少年にもっと教え

てと頼んでみる。すると彼は「だっていつか死ぬじゃん」と言った（p. 195）。

小学生と対話する、と言うとき、もしかしたら生きる希望に満ちた発言や、子どもらしい発言を期待するのかもしれませんが。しかし、強調されているのは、意味のない人生に怒り、それを全身で表現する少年でした。

「だっていつか死ぬじゃん」。その言葉はおそらく、さまざまなかたちで組織された生き方の中で抜け落ちてしまった言葉なのかもしれません。家族の中で、学校の中で、地域の中で、だれにも聴かれなかった言葉が、そこに現れたと考えることができます。私たち「考える人たち」は、ついつい「もっと教えて」と頼んでしまう。謎があったら、考えてしまう。さらなる思考に誘ってしまいます。すこしおせっかいでもあるし、小さい一歩なのかもしれません。それでもここに、哲学と対話のどちらをも大切に人の、生き方やあり方が現れていると思えます。

ところで、哲学研究者が普段住んでいる場所の多くは、とげとげしい茨の道そのものです。

途端に、数年前のある学会発表の風景がよみがえる。発表原稿を読み終えて顔を上げると、大勢のひとがこちらに弓矢を向けている。彼らの目はわたしのいちばんやわらかく脆いところに矢を定めていて、いまにも放たれる寸前であった。司会が「質問のある方」と言うと、矢が一斉に放たれた（p. 94）。

ここでは、弱さが、研究者たちの、学会の脆弱性が問題になります。私たちが学問にさらに取り組

みたいと願ったときに会えるのは、もしかしたら議論で叩きのめすことであつたり、よりよい正しさのために、だれかを引き下げるための質問すること、なのかもしれません。しかし、このことはなにも、学会のことだけには限らないでしょうし、案外と、私たちの日常の中に満ちていることでもあるでしょう。

だから、私たちは対話の中にケアの姿を求めます。

哲学対話は、ケアである。セラピーという意味ではない。気を払うという意味でのケアである。哲学は知をケアする。真理をケアする。そして、他者の考えを聞くわたし自身をケアする。立場を変えることをおそれる、そのわたしをケアする。あなたの考えをケアする。その意味で、哲学対話は闘技場ではあり得ない (p. 97)。

闘技場を拒否して、ケアのほうへと向かう。対話をする時に、誰かの考えを聴きながら、考えが変わり続ける「わたし自身」をケアする。考えは変えてはいけない、それを自分自身に課すほどに、苦しくなっていくことになるでしょう。ある考えから、別の考えへとゆるやかに変わっていく哲学対話では、知ることに結びついているのは、対話に向けられている自分自身の意識なのだから、自分の考えがまずは問題になるのでしょう。

そして、セラピーではない哲学対話では「あなたの考え」をケアするのであって「あなた」をケアするわけではありません。「あなたへのケア」は可能性として、希望としては存在しているけれど、いまのところ届きそうにないものとして、そこに存在しています。この感覚が、この本で語られる

様々なエピソードの魅力になっています。

わたしの行為は……見えなくなっている存在を見ると心が痛むとか、この世に不正義があることがゆるせないとか、自分を重ね共感して助けたいとか、抑圧されているひとの意識を変えたいとか、そういう倫理的配慮ではないということだ……わたしは宇宙のバランスを心配していたのである (p. 222)。

感動的な倫理的配慮ではなく、宇宙のバランス。この「軽み」の中に、さきほどの「あなた」へと向かわないケアの姿が反響しています。そして、宇宙のバランスの例として「チョコミントアイスが好きだ」という考えが説明されます。周りのみんなが「チョコミントアイスが好きじゃない」と言っているときに、誰かが宇宙のバランスのために「チョコミントアイスが好きだ」と言わないと宇宙のバランスがとれない。

私はここで、はっと気づかされることになります。確かに、そのとおりなのです。考えてみようとして対話に加わっているとき、そこには考えのバランスがあります。ああ、みんな同じこと喋ってるから、誰か反対の可能性について喋ってこないかな、と。組織の成員として、つまりは学校の先生として対話に加わっているときには、そうか、この考えを話しているのは、この人かということに気を配っています。あの人はまだ喋っていないから、喋ってもらおうかな、と。そして、おそらくはそのどちらもが、哲学対話で生まれるケアリングではあると思いつつ、宇宙を配慮する人の存在によってケアされる人も現に存在しているように思えるのです。

最後に、もうひとつだけ、あえて元の文脈を説明せずに引用してみます。

ここには、わたしの好きな木があったのよ。いつもお家の前を掃除するとね、この大きな木が目に入って、あいさつをして。昔からある木でね。でも、あるとき、知らないひとたちがきて、許可もなくこの木を切っちゃったの。かなしかった。ほら、切り株になっちゃっているでしょ (p. 86)。

好きなもの、愛していること、大切だと思うことと、それを書くこと。書くことも、もしかしたら別の闘技場へとつながっていて、そこには好きに書こうとすることを、切り倒そうとする人たちもいるのかもしれませんが。この本で語られるのは、自分自身から離れずに、哲学対話に関わろうとする人の姿と、語らずにはおれない細部、対話の特殊性への視線であって、私はそのような書くことの試みを愛する者の一人として、この本に心からの賛辞を贈りたいと思っています。

中川雅道（神戸大学附属中等教育学校）